

記者も夢見た甲子園（上）

■新編集講座 ウェブ版 第153号 2020/8/1

毎日新聞社 常勤顧問（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

新型コロナの影響は高校野球にも及び、夏の全国選手権大会が中止になる一方、同じく中止になった春の選抜大会の代替として、「2020年甲子園高校野球交流試合」が今月10日から阪神甲子園球場で開かれます。高校球児の夢の舞台、甲子園=写真①。この「聖地」とも言える場所で、私は駆け出しの時代、地域向け取材をしたことがあります。甲子園の土を踏むのは記者にとっても感激でした。当時を振り返ります。

■ 2年目で果たした「甲子園出場」

私が甲子園で取材したのは、入社し宇都宮支局に配属されて2年目の1982年夏でした。スポーツ面とは別に地元チームの活躍を地域面で報道するため、全国の支局から記者が甲子園に特派される制度があり、私も手を挙げていたのです。

入社2年目の夏に私の「甲子園出場」が内定。私は張り切って栃木県予選の取材に当たりました。有力校の試合を全て見るため、複数の球場を回る日々です。結果は足利工業高が優勝。地域面1ページをほぼ全部使い、決勝戦を詳報しました=図②。

最近の紙面=図③=と比べると、当時の紙面は見出しの表現が「勝った つかんだ 甲子園」「“歓喜” 足工 10年ぶり4度目の栄冠」と形容詞過多だったり、見出しの背景に日の出のような模様が入ったり、全体に大げさな印象を受けます。

■ 栃木と青森、2県を担当

県予選が終わると、いよいよ甲子園への準備です。足利工の戦いぶりはずっと見ていたし、選手や監督とも顔なじみになっていました。甲子園での取材も、まずは大丈夫でしょう。

ただ甲子園特派員は、総数を絞るため、1人2県担当が原則でした。割り振りは、チーム力や地域面の締め切り時間を考慮して決定。私は青森のチーム担当もすることになりました。

スポーツ面=図④=を読み直したり、地元の地域面を取り寄せたりして調べると、青森県からは木造（きづくり）高が出場すると分かりました。打棒が売り物で「津軽の暴れん坊」という異名があります。1969年の「全国大会決勝戦で延長18回引き分け再試合」=図⑤=の三沢以来、青森県勢として13年ぶりの甲子園勝利を目指すそうです。楽しみになってきました。



① 昨年夏の大会の開会式
112019年8月6日



② 1982年7月29日朝刊
栃木版



③ 2019年7月29日朝刊
栃木版



④ 1982年7月26日朝刊
スポーツ面(東京本社版)



⑤ 1969年8月19日朝刊
スポーツ面(大阪本社版)

■ 大学の同級生と鉢合わせ

組み合わせ抽選前日の8月4日、私は大阪本社＝写真⑥（当時は堂島の旧社屋）＝を訪れ、取材説明会に臨みました。全国に散っていた同期生の顔が何人も見え、久々の再会です。打ち合わせ後は、同期らと連れ立って甲子園へ。球場外壁を覆ったツタ＝写真⑦＝や、銀傘が独特の雰囲気醸し出す内野スタンド＝写真⑧＝を見ると、「甲子園に来た」という実感がわいてきます。私は大阪育ちなので、プロ野球の観戦に来場したことはあるのですが、自分で取材するとなると、気分は格別です。

真夏の日差しに照らされながらスタンドを歩いていると、大学時代の同級生に鉢合わせしました。朝日新聞に入社したのは聞いていましたが、青森支局に配属され、木造高の取材に来た由。世間は狭いものです。

■ 2校同時取材にぐったり

翌5日は大阪市内のホールで組み合わせ抽選会です。足利工は滋賀・比叡山と、木造は佐賀商との対戦が決まりました。地域面に必要な素材は、対戦相手と握手するキャプテンや監督の写真、相手が決まっの抱負、相手チームの横顔、過去の戦績（あれば）など多岐にわたります。

私は栃木と青森の原稿を書かないといけません。携帯電話のない時代なので、監督や選手の姿を見失ったら万事休す。両校の動きを目で追いながら会場を走り回りました。その合間に、相手チームの特徴を滋賀と佐賀の担当記者から聞く必要もあります。2校の取材をすませると、くたくたに疲れました。

今、改めて両地域面の記事＝図⑨⑩＝を読み返すと、「闘志むき出し」とか「さあやるぞ」とか決まり文句が多く、選手の肉声が伝わってきません。しかも省力化なのか、両地域面で同じ表現が目立つなど、できれば今ひとつです。未熟だったのでしょう。

■ 選手と車内で歌合戦

抽選翌日の6日は、7日の開会式を前にした谷間の日です。節目ではないのですが、地域面に何か甲子園の原稿を書くのがノルマです。

この日は開会式のリハーサルがあったので、朝から球場に向かいました。出番を待つ足利工の選手を見かけたので、写真を撮りインタビュー。甲子園に来た実感を聞けたので、これで原稿は書けます＝図⑪＝。

「次は木造だな」と探していると、例の朝日青森支局記者がいます。聞くと、今からスタンドで木造と佐賀商の監督が対談するとのこと。「地元紙も来るし、一緒にどうぞ」と誘われ、渡りに船と参加しました。

午後は電車を乗り継いで神戸市内のグラウンドに向かい、木造の練習風景の取材です。終了後、宿舎に帰るバスに便乗させてもらって、車内で歌合戦が始まりました。「記者さんもうどうぞ」と言われマイクを握ったのも懐かしい思い出です。青森版の原稿は楽しく書き上げました＝図⑫＝。

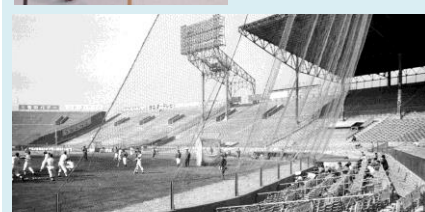
さあ明日7日は晴れの開会式。その翌日8日は木造の初戦です。甲子園の私も盛り上がってきました。



（上）⑥堂島にあった大阪本社の旧社屋。重厚な外観だった



（左）⑦甲子園外壁のツタ（2007年から実施した改装工事前）



（下）⑧銀傘が特徴的なスタンド（同）



（上）⑨1982年8月6日朝刊青森版
（左）⑩同日 栃木版



（右）⑪82年8月7日朝刊栃木版
（下）⑫同日 青森版

